



TITLE:

十-十五世紀ベトナム國家の「南」と「西」

AUTHOR(S):

桃木, 至朗

CITATION:

桃木, 至朗. 十-十五世紀ベトナム國家の「南」と「西」. 東洋史研究
1992, 51(3): 464-497

ISSUE DATE:

1992-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154417>

RIGHT:

十く十五世紀ベトナム國家の「南」と「西」

桃 木 至 朗

一 「南國」の對外關係

二 「南」

(一) 獨立初期ベトナムの「南進」

(二) チャンパー攻撃の意味

三 「西」——「雲南」から「タイ」へ

四 「ベトナム型華夷秩序」の確立

一 「南國」の對外關係

不屈の對中抵抗とその一方で「中國化」⁽¹⁾や「小中華」の建設という、「矛盾の統一」の中を前近代のベトナム史は歩んできた。それは當時のベトナム人の「われわれ意識」⁽²⁾をも、「北國」つまり中國に對する「南國」という國家民族意識の形で結晶させた。その完成を告げた文章とされる一四二八年の對明獨立宣言「平吳大誥」(吳は明朝のこと)では、「南國」⁽³⁾は「中華世界の一員ではあるが獨自の領域、文化、王朝、歴史をもつ、中國と同等の自立した存在」と位置づけられる。

この「獨自」の文化・歴史は當然、南中國・東南アジアの諸民族や「インド化された」東南アジア諸國と密接な關係を

もつ。だが、「南國意識」は基本的に對中關係にもとづく自己規定であり、中國＝漢民族以外との關係は視野に入っていない。密接な關係をもつものを視野に入れないということは、視野に入れる場合には見下すことにもなりやすい。

こうした歴史が史料のあり方を通じて現代の歴史家にも影響したこと、現代ベトナムでの研究がより強大な相手への抵抗闘争史に集中せざるをえなかったことなどのため、中國以外との對外關係史の研究蓄積は乏しい。しかしそもそも、「南國意識」をより全面的に理解するためには、そうしたものを形成させた對中關係の側だけでなく、その視野から外れたものの側をも見る必要がある。しかも現在のわれわれはベトナム史研究において、「東南アジア世界」という新しい参照枠組をもっている。筆者も再三紹介してきたようにこの枠組によって——一千年に及ぶ中國支配期（北屬期）の後であるにもかかわらず——十世紀の獨立以降、特に十四世紀までのベトナム國家・社會が「非中國的」でむしろ「東南アジア的」な要素を隨所にもっていたことが明らかにされてきた。⁽⁴⁾となると對外關係にも「平吳大誥」の定式とは違った視野が開ける可能性がある。

こうした觀點からベトナム國家の中國以外との關係史——とりあえずは「中央」や「全體」同士の——を見直し、それが國家統合や國家＝民族意識に對してもった意味を検討することが本稿の目的である。扱う時代は十世紀の獨立から「南國意識」が一應の確立を見る十五世紀までとする。そこでの方法上の狙いは二つある。第一に、ベトナムの對外關係の特徴を「中國モデル」だけでなく「東南アジアモデル」との比較をも通じて明らかにすること、第二に、あるものが完成した十五世紀の側を基準としてそこに至る必然の過程のみを探るのではなく、十世紀の出發點の側に視點を据えて様々な可能性の中での摸索・選擇の積み重ねの歴史を追及することである。

二 「南」

(一) 獨立初期ベトナムの「南進」

ベトナム國家が獨立後に「北」＝中國以外に關係をもった相手としては——東は海、西は山脈という地理的條件のため——南方、今日の中部ベトナムの地を占めたチャンパー（占城）が最も重要であつた。この章ではチャンパーとの關係を検討する。

獨立後のベトナムとチャンパーとの關係についての文字史料は、中國文獻やチャンパー碑文中の斷片的な記録を除けば、ほぼベトナム史料、それも『大越史記全書』（以下『全書』）と『大越史略』（以下『史略』）の二つの年代記に限られる。こうした乏しい文字史料を用いた事件史の實證的研究は、G・マスペロのチャンパー通史にはば盡きており、その後これといった成果を見ない——ベトナム史・東南アジア史の通史・概説書は澤山あり、そのどれにでもベトナム・チャンパー關係の重要な事件が一通りふれられているが——。その中で西側諸國では、G・マスペロのチャンパー通史の實證的研究とレー・ティン・コイに代表されるベトナム史の視角、それらを總合したセデスの東南アジア史などによって、最近までの古典的通説が形成されてきたと言えよう。

さて、『全書』や『史略』を見るとまず目につくのは、表1のような兩國の頻繁な抗争である。言うまでもなくこれは、北屬期に始まり一四七一年の黎聖宗の遠征以降はチャンパー國家の解體過程へと進んだ、長期間の抗争の一部をなす。このためベトナムの「南」との關係全體が——「北」との關係においてと同様——、對立・抗争の歴史として理解されることも多かった。しかも「北」については抵抗闘争の一方での「中國化」にも注意が拂われ、對中關係の不可避かつ規定的な意義が早くから議論されてきたのに對し、「南」との關係は全く世界を異にする相手との偶然的な關係にとられがち

表1 『全書』『史略』に見える10～15世紀の占城との抗争

ベトナム	チャンパー	年代	内 容
丁朝		979	駙馬吳日慶、占城に奔り舟師を率いて入寇→暴風で覆没、占城王は逃れる(A)
- 980-	第6王朝	982	黎桓、使者が捕われたため親征→「王窺〔波〕眉税」を斬り首都を破壊(AB)
前黎朝		983	黎桓親征時に占城に遁去した管甲劉繼宗を捕えて殺す(A)
- 991-	第7王朝	997	「占城以兵窺我邊境」(A)
-1010-		1020	開天王らに布政寨で占城人を撃たせ「其將布令」を斬る(AB)
		1043	「占城風浪賊掠取海邊民」→「命陶處中鎮之乃平」(A)
		-1044-	1044 占城が入貢しないので(A)李太宗が親征→「其主乍斗」を斬り佛誓城に入る(AB)。「乍斗妃媚薩」を捕えて歸る(A)
	第8王朝	1068	占城が「擾邊」(A)→1069李聖宗が親征、「其主制矩」を破り(AB)「眞臘界」で捕える(B)。地哩・麻令・布政三州を以て制矩の還國を許す(A)
李		-1074-	1074 「占城復擾邊」(A)
	第9王朝	1075	「李常傑總諸軍伐占城、不克」(A)
		1103	演州人李覺謀反、敗れて占城に逃れ「占城主制麻那」は入寇して地哩等三州を回復→1104李常傑が占城を討ち三州を奪還(A)
	-1139-	1132	「眞臘・占城寇父安州」→太尉楊英珥に敗る(AB)
	王第10朝	-1145-	1150 亡命占城人「雍明些疊」を王とすべく上制李蒙ら五千餘人を以て占城に護送(B。Aは1152年)→「其主制皮囉筆」に拒まれ、皆死亡(A, 1152年)
朝		1166	占城「掠我瀕海小民而還」→1167「命太尉蘇憲誠伐占城」→占城が和を請うたので班師(A)
	第11	1177	「占城入寇父安州」(AB)
		1203	「占城國王布池」が「其叔父布田」に逐われ父安に来るが、現地官僚と對立しこれを大破して歸國(AB)
-1225-	王	1216	「占城・眞臘寇父安州、州伯李不染敗之」(A)
	朝	1252	占城が入貢はするが「復乞故地、且有窺覬之意」なので陳太宗が親征→「占城主の妻布耶羅」などを捕えて歸還
		1312	「占城主制至」が反したので陳英宗が親征→制至を捕え「封其弟制陀阿婆粘爲亞侯鎮其地」
-1318-		1318	「遣惠武大王國瑱征占城」→「僞主制能」は爪哇に奔り、代わって「種魯阿難」を立てる(A1326年條にこの旨を記す)
		1326	「惠肅王伐占城、無功而還」
		1352	「女婿茶和布底」に逐われた「制某」が來奔→1353 大舉占城を伐つも水軍の運糧が阻まれたため撤兵

ベトナム	チャンパー	年代	内 容
陳朝	第12王	1353	「占城寇化州，擊却之，頗失利」
		1361	「占城草賊駕海，掠進哩海門民，本府軍擊破之」
		1362	「占城掠化州」
		1365	「占城人掠化州春遊民」
		1366	「占人寇臨平府，府官范阿窓擊敗之」
		1368	明字陳世興らに占城を伐たせるが，「占洞」で伏兵にあい大敗
		1371	廢位された楊日禮の母が占城に逃亡，これに誘われた占城水軍が京師を奇襲，寇掠して去る
	第13王	1376	「占城寇化州」→陳容宗が親征するが 1377 閩槃城外で「占城主制蓬莪」に敗死，逆に占城水軍が京師を犯す
		1378	占城，前年擒にした御講王を立てて父安に寇し，さらに大黃江，京師まで犯す
		1380	占城，新平・順化人を誘い父安・演州に寇す→清化に進んだが黎季犛に敗れる
		1382	占城，清化に入侵するが黎季犛軍に敗れ退く
		1383	黎季犛，舟師を領して占城を伐たんとするが風濤に阻まれ撤退○制蓬莪と「首將羅鯁」，「陸行山脚」して廣威鎮に攻め込む
		1389	占人清化に寇し，黎季犛軍を破る→1390 陳渴眞，海潮江で制蓬莪を殺し，占城軍を大破する
		1391	左聖郎軍將黃奉世，占城地方に出哨するが伏兵にあい自潰
胡朝	第13王	1396	龍捷軍將陳松，占城を伐ちその將布冬を擒にして還る
		1401	胡松らに占城を伐たせるが失敗
		1402	胡漢蒼，大舉して占城を撃つ，「占主巴的吏」おそれ，占洞，ついで古壘洞を納む
		1403	胡漢蒼，閩槃城を圍むが「閏九月，絕糧，不克而還」
屬明	第14王朝	1407	占城，明のベトナム出兵に乗じて升華を奪回，化州に寇す
		1428	
黎朝	第14王朝	1434	「占城掠化州人」
		1444	「占城主責該」が化州に寇し，黎朝は反撃の出兵を決定
		1445	占城，化州安容城に入侵，洪水にあって大敗
		1446	黎受らの黎朝軍，閩槃城を破り責該を捕える。「占城故國王布提姪麻訶貴」が冊立を請う
		1458	
朝	第14王朝	1469	「占城人乘船航海，寇擾化州」
		1470	「占城國王槃羅茶全」化州を襲う→黎聖宗，親征を決める→1471 閩槃城を陥れ茶全を生擒して歸る。藩籠に走った「其將遮持持」を占城王に封じ，華英・南蟠二王とともに羈繫する。○「再征占城，擒其主茶遂及部黨回京」

チャンパーの王朝名は〔Maspero 1928〕による。各事件の典拠は1225年まではA＝『全書』B＝『史略』，その後はすべて『全書』。

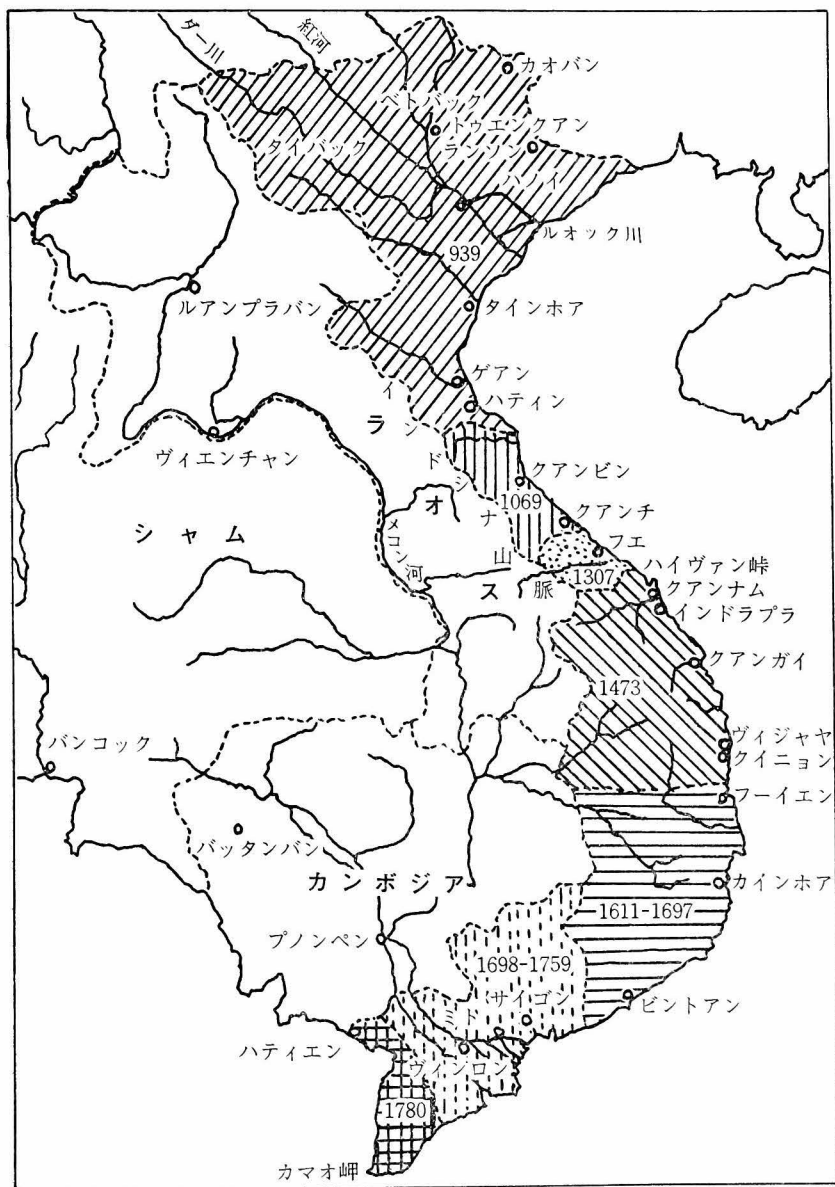
だった。それは力競べと領土の争奪だけの單純な關係であり、ベトナム側の「中國式國家」のパワーと「民族」のダイナミズムのバロメーターという以上の意味をもたなかった。

また抗爭の経過・結果も「十五世紀以降の側から」安直にとらえられてきた。つまり十世紀末ないし十一世紀以降一貫してベトナムが優勢で、十五世紀の全面勝利（それはさらに近世の南部進出の道を開く）に向い着々と「南進」を行ったという説である。この二つの單純な見方が結合して、「南」との關係史イコール「一貫した南進」というイメージが流布してきた（¹¹（地圖参照。地圖中の年代はその領域の獲得年を示す）。これら雙方を批判するのがこの章の目的だが、まずはより實證的な事實認識に関わる部分の多い「一貫した南進」説から論じたい。

それは概ね次のように説く。獨立當初のベトナム領はほぼ現在のハティン省までだったが、九八二年、黎桓がチャンパールの首都インドラプラ（現クアンナムダナン省）を親征・破壊し、チャンパールの首都は南方のヴィジャヤ（現ビンディン省）に移る。¹³李朝期（二〇一〇—二二五）に入ると二〇四四年、一〇六九年とヴィジャヤへの大遠征が成功し、一〇六九年には捕えたチャンパー王の身柄と引き換えに地哩・麻令・布政（現クアンビン省・クアンチ省北部）を割譲させる。これこそ南方への領土擴大の第一歩であった。¹⁴

領土擴大の第二步は陳朝期（二二五—一四〇〇）の「玄珍公主の降嫁」という有名な事件に伴って實現される。一三〇六年、陳仁宗上皇は元との戦い以來協力關係にあったチャンパー王ジャヤ・シンハヴァルマン三世に娘を與え、その代償として烏・里二州（現クアンチ省南部・トゥアティエン省）を得て順・化二州と改名した。これによりベトナム領は要衝ハイヴァン峠（海雲關）まで進んだ。そして十四世紀後半の猛反撃も失敗に終わるとチャンパーの命脈はいよいよ盡き、黎朝下（一二八—一七八九）の一四七一年、黎聖宗のヴィジャヤ（闍黎）攻略によって、領土擴大の第三步にして決定的な段階が實現された。その後十八世紀にかけて、廣南阮氏政權（一五五八—一七七七）の下でチャンパーの殘存領域の併呑とより南方、メコンデルタのカンボジア領蠶食へと、「南進」の流れは滔々と續いた。

圖版1 ヴェトナムの形成



(典據) 坪井『近代ヴェトナム政治社會史』(註11) 16頁の地圖に加筆

だが史料を素直に讀むかぎり、「一貫した南進」説を十四世紀以前にまで遡らせることには無理がある。おそらくそのため、直接この時期に關する考證を行っていないわけではないが、新しい見方を提起する論考が近年次々と現れてきた。初期の南進は閒歇的で獲得領域の統治も十全には行われなかった⁽¹⁵⁾兩國の力關係のバランスは十四世紀末までは崩れていなかった⁽¹⁶⁾、一四七一年以前のベトナムは積極的な領土擴大の意圖をもたなかった⁽¹⁷⁾などの見方である。これらの後ではいままの感が強いが、確認のため史料に當ってみよう。

まず領土擴大の第一歩とされる布政・地哩・麻令三州だが、一〇七五年に地哩を臨平、麻令を明靈に改め、三州の地に「民を招いて之に居らしめ」たこと（『全書』本紀三 李仁宗太寧四年條）、一一〇四年にチャンパーが三州を回復しようとして失敗に終わったこと（表1）などがよく知られている。ところが問題は、從來の研究が全くふれていないその後の時期にある。

實はこの地域に關する記録は、一一三二年の、國に逃げ歸ろうとした占城人が日麗⁽¹⁸⁾（現クアンビン省の Cùg Nhàt Lê 附近）で捕えられたという記事を最後に、十三世紀末までベトナム史料から姿を消す。一方、一一二八年以降、北鄰りの乂安（現ゲアン・ハティン兩省）への眞臘・占城の攻撃が繰り返されたことがよく知られている。この年眞臘が「乂安州波頭歩」と「乂安州杜家郷」に來襲したのを皮切りに、一一三二年に眞臘・占城、一一三六年と一一四八年に眞臘、一一七七年に占城、一二一六年にも占城・眞臘の來侵が記録される。⁽¹⁹⁾眞臘は東北タイ・南ラオスから南シナ海への出口を求めて山越えで來襲したと見られるが、⁽²⁰⁾占城はいつもはるか南方からクアンチ・クアンビン沖を素通りして來襲したのだろうか。一二〇三年にベトナムに亡命した「占城國主布池」（表1）も乂安に亡命する。一一三二年の占城入寇以降もベトナム側がずっとクアンビン以南を支配しつづけたと考えるのは、いかにも不自然である。

陳朝期に入っても乂安より南の地名はなかなか史料に現れないが、十三世紀末に編まれた『安南志略』（卷一 郡邑）にようやく、布政府路の名が見える。また一三一二年の英宗の親征以降には、臨平府の名が史料に現れる。臨平府は一三七

五年に新平府、一三九七年に西平鎮と改稱される。臨平以下いずれも、現クアンビン・クアンチ北部の舊三州の地を領したようである。そしてその間に一三〇六年の烏・里二州の割譲が實現する。チャンパーによる烏・里二州回復の企ては、一三一二年の英宗の親征により粉碎される。

以上を見ると陳朝期にはより本格的な「領土擴大」が行われたようだが、これも十四世紀後半のチャンパーの猛反撃によりすべて奪回されてしまう。表1に見る通り陳朝側の優勢は一三一八年の恵武大王國瑱による遠征までで、一三二六年、五三年、六八年の出兵は不成功に終わり、一三五三年には占城が化州に入寇する。化州・新平への入寇は一三六二年、六五年、六六年、七六年と続き、七一年には初めてハノイが奇襲に遭う。七七年、ヴィジャヤに親征した陳睿宗が敗死し、力關係の振り子は完全にチャンパー側に傾く。

翌七八年、父安・大黃江（紅河下流部）を席捲したチャンパー軍はハノイをも略奪して去る。八〇年には「占城新平・順化人を誘って父安・演州（現ゲアン省東北部）を攻めさせ人口を擄掠し」（『全書』本紀八 陳廢帝昌符四年）、清化（ティンホア）まで攻め寄せる。八二年にも清化を攻めた占城は、八三年にはチュオンソン（インドシナ）山脈沿いに北進し、ハノイ西方の廣威鎮（現ハタイ省）を奇襲してハノイを震撼させる。八九年、清化で陳朝軍を破った占城軍は、翌年海潮江（ルオック川）に進出したが、ここでベトナム側の新兵器・火銃により國王制蓬莪が戦死し、ようやくその猛攻は終熄する。この間「父安人ふたごころを懷き、新平・順化多く叛いて占に従う」（『全書』本紀八 陳順宗光泰三年條）ありさまだった。新平・順化が一三八〇年代にチャンパー側に服していたことは間違いない。

このように、李陳兩朝の隆盛時に「領土」擴大があったとしても、王朝衰退時にはすべて取り返されている。「一貫した南進」説は最後にベトナムが勝ったから言えることにすぎない。⁽²¹⁾ 南進が不可逆の過程となり、ドンソン文化以來ほぼ一定していた「ベトナム」の領域が本當に擴大を始めたのは、一三九〇年の逆轉勝利の後ベトナム側がただちに反撃した際⁽²²⁾か、明の支配（一四〇七―一七）をはねのけ黎朝が成立した後のことと言わねばなるまい。

また兩國の力關係については、ベトナム史料に頻出する「占城の朝貢」⁽²³⁾もベトナムの「宗主權」⁽²⁴⁾を示すように見え——領土擴大と屬國化は別の事柄なのだが——、「一貫した南進」論者を力づけてきたと思われる。確かに後述するように、ベトナム側はチャンパーの朝貢國化を欲しており、それが實現した時期もあったであろう。しかし實際の朝貢のプロセスや内容はほとんどわからないので、朝貢という史料の記述自體は、ベトナム側の「願望」ないし「理解」を示すにすぎず、力關係を示す獨立した手掛りとしては使えない。しかも相手は、中國との、貿易のための朝貢關係に慣れた東南アジア國家である。

力關係の推移を以上のようにとらえると、「一貫した南進」説がその原動力と考えていたものについても、もはやそれを維持する根據はなくなる。その一つは「中國化」などによる強力な國家・軍事組織であり、もう一つは早期に國家的治水・水利事業が發展した紅河デルタは獨立當初から一貫して人口過剰で、飢饉や戰亂のたびに南方へ逃れる人が續いた、國家も過剰人口のはけ口を求めて領土擴大を企てたという「農民の南進」⁽²⁵⁾説である。

しかし一でも述べた通り、今日獨立當初の國家機構や統治原理——官僚制と常備軍、儒教イデオロギーなどの意味で——の「中國化」はあまり進んでいなかったことが、西側でもベトナムでも認められている（註5）（參照）。それらが顯在化してくるのは十四世紀以降のことである。また紅河デルタで國家的治水・水利事業が展開するのは陳朝から黎朝前期（一二八一—一二五七）にかけてのことで、それも限界に達して最終的にデルタの過剰人口が表面化するのには黎朝後期のことを考えるべきであろう。⁽²⁶⁾

李朝期のベトナムは南中國から奴隸を大量購入していたと見られる⁽²⁷⁾、チャム人奴隸も十五世紀まで重要な役割を果たしつつける⁽²⁸⁾。相對的・局地的な人口過剰は常に存在しうるから、一〇七五年の南方三州への民の招募なども人口對策の意味があったかもしれないが、獨立初期の北部デルタは全體的には人口不足だったと見て間違いない⁽²⁹⁾。「中國式國家と農民の南進」の壓力は陳朝期から顯在化し、十四世紀末以降によりやくチャンパーの抵抗を粉碎しうる水準に達したと理

解するのが妥當であらう。

(二) チャンパー攻撃の意味

以上のように、獨立後のベトナムがチャンパーと頻繁な抗争を繰り廣げたからといって、兩國關係をベトナム國家と北部農業社會の一貫した膨張過程と見ることは出来ない。一方ベトナム側年代記では表1のように、抗争のほとんどがチャンパーからの國境侵犯や朝貢拒否などに對するベトナム側の懲罰、あるいはチャンパー側の舊領回復策動とベトナム側の反撃という圖式で描かれている。しかしチャンパー側などにこれに對應する史料が知られていない以上、こうした「まづろわぬ蠻夷」式の見方を鵜呑みに出来ないことは言うまでもない。

そもそも兩者の間にはある種の「親近性」が見られ、全く世界を異にする者同士——それだけに共存不能で存亡を賭けた對決に陥りやすい——の抗争だけの歴史と見るのは間違っている。その親近性は文化史の面では一應知られてきた。李陳朝期の音樂や彫刻へのチャンパーの影響、ラーマヤーナの流入や民間文學の交流などがそれで、社會主義ベトナムの研究者たちはそれらにもとづいて民族・民衆間の友好を説き、抗争を支配者間の出來事としてきた。⁽³⁰⁾民衆と支配者という單純な二分法はさておき、文化的影響の密度については、「華夷意識」を前提とした上での單なる異國趣味の發現と片附けてよいかどうか、なお検討を要する問題であらう。

文化的親密さを物語るエピソードは他にもある。陳太宗の子の一人昭文大王日燭は外國人と遊ぶのを好み、象に乗って占人の村（李聖宗の遠征の際に捕えてきた占城人を居住させた所）に行き、三、四日泊まって歸ることもあったという『全書』本紀七 陳憲宗開祐二年（一三三〇）。一三七四年になって、軍民に「北人の衣様を服すること及び占・牢等國語に倣うこと」を禁じた⁽³¹⁾（同睿宗隆慶二年條）というのも、從來は中國風の服裝や占（チャム）語・哀（哀牢・ラオ）語が珍しくなかったことを示すものであらう。

こうした文化的紐帶を重視するならば、政治關係においても見方を變えざるをえない點がある。例えば一三〇六年の玄珍公主の占城王への「下嫁」に對しては、朝野の文人が王昭君の故事などを引いて大反對したというが『全書』本紀六 陳英宗興隆十四年夏六月條、それは當時擡頭しつつあった文人官僚層にとつては一大事であっても、陳王家にとつては大したことではなかったのかもしれない。⁽³²⁾

もう一つ注目すべきは表2のような、失脚した指導者や國內反對派がそれぞれ相手國に亡命し、また相手國の力を借りて自國の支配權を握ろうとする事例の多さである。ベトナムの場合は他に適當な亡命先がなかったとも考えられるが、いづれにせよ上記のような文化的親近性と雙方のある種の「寛大さ」がなければ、これほど頻繁な雙方方向への亡命は起こりえなかったのではないか。⁽³³⁾

こうした「何かの時は相手方につく」「來た者は誰でも受け入れる」「相手の力を借りてカムバックするようなことも認める」性格は、兩國の境界地域の地方勢力の間では、「強い方につく」という形で現れる。これを兩國の中央權力の側から見れば、ベトナムと西方のラオス・タイとの「境界」が「雙方の中心から發する波紋の重なり合い」であつたのと似たような狀況ということになる。⁽³⁴⁾

紅河デルタ南方のティンホア（愛州↓清化）とゲアン・ハティン（演州、驩州↓父安）、特に後者をそうした地域と考えることができる。これらの地域は紅河デルタと同じく漢代から北屬下にあり、ティンホアからは前黎朝の創始者黎桓が出るなど「中國化」や「ベト族化」が進んでいたように思われるが、一方で七二二年の驩州人梅叔鸞の舉兵は林邑・眞臘と結んで行われたとされる。⁽³⁵⁾そして獨立後、表2に見る通り九八九年に管甲楊進祿が「驩・愛二州をもつて占城に附かんとし」、一一〇三年には演州人李覺が反亂に失敗した後、占城に逃れる。また一一三二年には「常に險要の處に伏して父安州人を擄にし眞臘國に轉賣し」ていた占城人三人が捕えられるという事件も起こる（『全書』本紀三 李神宗天順五年九月條）。

この頃から眞臘・占城が父安の地にしばしば「攻め寄せた」ことは前述の通りだが、そもそもこれら南方諸州、特にゲ

表2 『全書』『史略』に見える10～15世紀の占城との間の亡命事件

年代	ベトナム→チャンパー	年代	チャンパー→ベトナム
979	呉朝の一族の呉日慶、丁朝下で不満を抱き占城に奔る。占城王の舟師とともに入寇(A) (985「占城王施利陀盤吳日歡」が宋に入貢)		
983	管甲劉繼宗、黎桓の親征時に占城に遁去す(A) (986占城主として宋に朝貢)		
989	管甲楊進祿、驩愛二州をもって占城につかんとするが、占城納れず(A)		
1005	黎桓の死後、王位継承争いに敗れた東城王が占城に奔らんとするが果たさずに殺される。	1039	王子五人來附(A)
1103	演州人李覺、反亂後亡命(A)	1040	「守布政塞人布令・布哥蘭・沱星」と部屬百餘人來附(A)
		1130	「國人雍麻・雍勾」が來附
		1150	「國人雍明些疊」亡命、ベトナムの後押しで王になろうとし失敗(B。Aは1152年)
		1203	「國主布池」父安に亡命するも現地官僚と對立。これを大破して歸國(AB)
		1279	「占城使制能等」が内臣とならんことを願ったが納れず
		1352	「王制某」女婿に逐われて來奔
1371	廢位された楊日禮の母が亡命、占城を誘い入寇させる		
1389	廢された先帝の弟元耀が亡命、翌年占城王制蓬莪とともに入寇	1390	制蓬莪の死後、部將の羅體が位を奪ったので先王の子制寧奴矩難と制山拏が來奔
		1397	將軍制多別と弟の慕華、子の伽葉ら挈家來降
1407	胡氏滅亡時、化州の「左州判阮嚕」は「挈家去占城」	1434	「占城管象頭目葵・葵二人」が來降
		1446	「占城故國主布提姪麻訶貴」が來降、冊立を請う
		1448	「占城人潘某」男婦三百四十餘人を率いて來降

(各事件の典拠は1225年まではA=『全書』B=『史略』、その後はすべて『全書』。宋への朝貢は『宋會要輯稿』蕃夷4 占城)

アン・ハティン地域では占城・眞臘などの政治的影響力と人々の活動が及んでおり、その中で場合によってはベトナムから離れるような志向をも示したものと考えられる。その後、これらの地域への李朝の支配は何とか守り拔かれ、陳朝も王族を配置して清化・父安の支配に努める⁽³⁶⁾。だがそれでも、(一)で見た通り十四世紀後半のチャンパーの猛攻の際には「父安人はふたごころを懷いた」のであった。

次にクアンビン以南の地域はもともとチャンパーの影響下にあったが、表2の通り一〇四〇年に布政塞人が亡命してくるようなこともあったから、やはりいざとなればベトナムにつくような地方勢力が存在したのである。そして李・陳朝を通じてこの地域の争奪戦が繰り返され、十四世紀前半にはベトナム側の支配がトゥアティエン方面まで及んだ筈だったが、(一)で見た通り新平・順化勢力は一三八〇年、占城がこれを「誘って」父安・演州を攻めさせ、以後一三九〇年まで「多く叛いて占に従」っていた。しかし同年、制蓬莪が死ぬと新平・順化は再びベトナムにつく。

以上からベトナムのチャンパー攻撃、ひいては親近性の一方での頻繁な攻撃という對チャンパー關係全體が、何を意味するのかをあらためて考えてみよう。それにはチャンパー側のベトナム攻撃の目的・意味⁽³⁷⁾、兩者の抗争に對する中國の認識や態度なども考慮する必要があるが、ここではベトナム——特に中央權力ないし全體——の視點に絞って検討したい。

まず軍事攻撃の目的について。第一に明らかなことは、(一)で見た通り十四世紀末以前の出兵で領土擴大を果したものはむしろ少ない。九八二年、一〇四四年、一二五二年など、首都陥落その他の成果を挙げながら新規の領土擴大を行った形跡がない。チャンパーの舊領回復策動を粉碎した一一〇四年、一三一二年も、その氣になればさらなる領土擴大は可能だったのではないか。領土擴大が常に攻撃の目的だったとは考えにくい。

むしろ多くの場合、出兵の目的はチャンパーの朝貢國化にあったと見られる。⁽³⁸⁾ 例えば一〇四四年や一〇六九年の出兵の直接の理由は占城が久しく入貢しなかったこととされる。九四四年には占城國使を朝貢の際に禮に違ったと責め(『全書』本紀一 黎大行應天元年條)、一三四六年にも「遞年朝貢缺禮」を責める(同七 陳裕宗紹豐六年條)。さらにベトナムがチャン

パーの統治者を冊立しようとした例も見られる。チャンパーからの亡命者を護送して王位に着けようとした一一五〇年(表1)、一三五三年(表2)の例の他、一三二二年、一三一八年の出兵の際にも、捕われたり逃亡した舊主に代えて別の人物を擁立している。一一九八年には占城側が求封したとされる(『全書』本紀四 李高宗天資嘉瑞十三年、十四年條)。

もう一つ、破壊・略奪それ自體も出兵の目的として考慮する必要がある。(39) 九八二年に「士卒を俘獲することあげて計うべからず。官妓百人及び天竺僧一人を獲え、その重器を還す。金銀寶貨を收むること萬をもつて數う。その城池を夷いその宗廟を毀つ」(『全書』本紀一 黎大行天福三年條)、一〇四四年に「馴象三十餘を獲え、五千餘人を生擒す」「乍斗の妻妾及び宮女の歌舞西天曲調を善くする者を俘す」(同二 李太宗明道三年條)、一〇六九年には「その主制矩及びその衆五萬人を獲う」(同三 李聖宗天貺寶象二年春二月條)、一二五二年に「占城主の妻布耶羅及びその臣妄人民を獲えて歸る」(同五 陳太宗元豐二年條)など、捕虜・戦利品の記録がその意味で注目される。

ではチャンパーの朝貢國化やその略奪・破壊はどんな意味をもっていたのだろうか。その問題は東アジアと東南アジアという二つの異なる文脈から考察することが可能であろう。

まず東アジア的文脈では、ベトナムにとって最も基本的な問題だった「北」(40) 中國からの獨立の維持との連動性が注目される。一〇七六年など中國とチャンパーがベトナムを挾撃しようとする場合があり、ベトナム側は中國に抵抗するための「後背地」の確保を必要としていた。(41)

また「自らの中國化による對中抵抗」の反映として、ベトナムが東南アジア諸國に對して「小中華」として臨んだことも昔から説かれている。しかし「小中華」として臨むとはどういうことかは阮朝期(一八〇二—一九四五)を除きほとんど考察されておらず、特に十四世紀以前については、獨立ベトナムが中國から「華夷意識」を繼承したこと、「中國式國家」イコール膨張主義であることなどが安易に信じ込まれてきたにすぎない。だがそもそも、「華夷秩序」——理念的には靜的なもの——と不斷の膨張という動的な性格は、「中華帝國」を支える原理としては區別して考えるべきものだろう。

獨立初期の「不斷の膨張」が強調されすぎてきたことは前述の通りである。他方、北屬期の北部ベトナムが南海交易據點として繁榮し、周邊諸國の對中朝貢の窓口ともなっていたことは間違いないから、「華夷秩序」的發想を獨立後のベトナムがもち續けていても不思議はない。しかも「中華帝國」の存立にとって、自らの外縁の非中華世界の支配は原理的に不可缺である。とすれば「南國」すなわち「小中華帝國」としてベトナムが中國に對抗するためにも、自らの華夷秩序を築く必要があった。⁽⁴³⁾その唯一可能な相手が「南」だった。チャンパーは「夷」として一方で「南國」から外在化されつつ、他方でその秩序に組み込まねばならなかったのである。

ただしいかにベトナムが獨立當初からそうした觀念をもちつづけ、中國式年代記でそれを表現しつづけようと、現實の力關係はそれにふさわしいものではなかった。そこで雙方の亡命や邊境の兩屬性など、中國でも北方民族との間ではよく見られたようなプラグマティックな關係が見られたり、相手を「德をもつて化す」だけの力の差がないからこそ頻繁に武威を示す必要が生じたりしたわけである。十四世紀末以降ようやく、「華夷秩序」にふさわしい力關係が實現される。⁽⁴⁴⁾

次に東南アジア的文脈から見ると、獨立初期ベトナムの國家・社會はより直接的にチャンパー攻撃、朝貢國化などによる利益で成り立っていた面がある。たとえば奴隸勞働力や南海產品の獲得が經濟的に重大な意味を有したことがまずもって明らかである。それについてマルクス主義的觀點から、十五世紀まで奴隸制ウクライドが（副次的ではあるが）不可缺⁽⁴⁵⁾だった、十四世紀以前は私的土地所有が未發達（アジア的生産様式—村落共同體的土地所有の卓越）で、支配階級の富は動産の形で獲得・蓄積されたなど、⁽⁴⁶⁾「封建制が全面的には發達していない狀況」が説かれている。

一方「地域研究的な東南アジア史」の側では、王權の交易への依存度の高さが指摘されてきた。南海交易の大幹線から外れていた當時のベトナムにとって、大交易據點、輸出品産地であるチャンパーからの貢納・掠奪その他の方法による交易品の入手は死活の課題であったと考えられる。⁽⁴⁷⁾

次により政治的な統合維持の角度から問題をとらえることもできよう。一〇四三年、李太祖（在位一〇二〇—一〇二八）

の没後占城が朝貢しない理由を尋ねる李太宗に對して臣下は

陛下は德を加えられましたが威はまだ廣げられていないからです。つまり陛下御即位以來、彼が命に逆いて朝貢しないのに對し、ただ德と惠をもってこれを懷かせるだけで、いまだかつて威と武をもってこれを征しておられません。これでは遠人を威することはできません。臣が恐れますのは、海内異姓諸侯も皆、占城にならうことです。どうしてただ占人だけの問題と言えましようか。

と答えたので太宗は親征を決意した(『全書』本紀一 明道二年秋八月條⁽⁴⁸⁾)。ここにはチャンパーを「華夷秩序」に組み込むためには武力が必要だという認識が見られるが、同時にその武力は「海内異姓諸侯」への示威でもあった。しかもそれらは、太祖没後行われていないところに問題があると考えられていた。

このことは、筆者も再三述べてきた獨立初期ベトナム國家の特徴にはつきり合致する。つまり地方勢力への支配や王權の安定の制度的保障としての、官僚機構や儒教的王位繼承システムは十分發達・機能していない。従って身内にも敵にも「能力」を見せつけた者だけが支配者になり、「見せつけられた」側はそれに服従する。そこで軍事行動を中心とする能力の誇示——そこには當然、略奪や貢納の強要によって富を獲得し、それを身内に再分配するという經濟的意味が伴う。官僚機構の未發達ゆえ租税を支配の經濟基盤にはしえないのである——がカギを握ることになる。しかも血筋の威力が弱いから、代替わりごとに能力の誇示が必要になる。ところがベトナムの北は中國、東は海、西は山である。南海交易などによるチャンパーの富は莫大である。となれば——「北」との交渉・抵抗の成功はもちろん最大の能力の誇示になるが、それは必要な時にいつでも出来ることではないので——チャンパー攻めが王權正當化の手ごろな手段としてしばしば選ばれるのは當然であろう。

こうしたチャンパーの位置づけをよく示すのは、一三二九年冬、陳明宗上皇が沱江道(北部山地のダー川流域)の「牛吼蠻」を親征しようとした際に、權臣陳克終がこれを諫めた言葉である(『全書』本紀六 開祐元年條)。彼は沱江が瘴癘の地で

あり、川が急流で行軍に不利なことを述べた後に「占城は瘴毒がなく、しかも前世の帝王たちは親征して、多くその主を擒にしてみました。彼（引用者注―牛吼蠻）を許して占を征するにしくはありません」と述べる。チャンバ攻撃は「華夷秩序」が要求しただけでなく、「東南アジア的國家」ないし「マンダラ」⁽⁴⁹⁾が、力の誇示と勞働力や財寶の入手のために要求したことであったわけである。雙方向の亡命や邊境の兩屬性など、「マンダラ」同士には當り前の現象は十四世紀後半にもなお見られる。「華夷秩序」がなかなか實體化しなかったのは、單に相手と比べて量的な力が不十分だったからではなく、ベトナムの國家・社會が「華」とは質的に異なる原理で動いていたためでもあると考えたい。

三 「西」——「雲南」から「タイ」へ

紅河デルタを中心とするベトナム王朝國家の「西」と言えば、普通思い浮かべるのは北部のタイバック地方から中部のチュオンソン山脈へと續く山の世界と、その背後に位置するメコン水系である。そこでの主な交渉相手は、獨立初期の眞臘を除けばラオ族などのタイ系諸民族とラオス國家だった。ベトナム國家にとって「北」や「南」が「正面」であったのと同じ、大山岳地帶を控えた「西」は「側面」にすぎず、そことの關係は事件史としてのみ語られるのが常だったが、近年ようやく、「西方關與」の意味が論じられるようになってきた。⁽⁵⁰⁾

ところが従來の研究が全く看過してきたと思われる事柄が一つある。それは當時のベトナムにとって「西」とはどこだったのかという問題である。現在の感覺ではそれはタイバック・チュオンソン地域に決まっているように思われるが、當時は必ずしもそうではなかった。

『欽定越史通鑑綱目』前編一 雄王條謹按に「陳黎以前の疆域、東は海に至り、西は雲南に界し、南は占城に界し、北は廣西に界し、東北は廣東に界し、西南は老撾に界す」とあり、『全書』本紀一〇 黎太祖丁未（一二二七）十二月十七日條下には、（明に攻められた際に）「我が國人民……壯者南は占城に走り西は大里に奔る」とある。大里は大理の音通

であろう。十五世紀以前のベトナムにとって西と云えばまず雲南を指したというわけである。特に南詔・大理國家が存在し、雲南が「北」＝中國の一部でなかった時代には十分考えられることである。しかし從來のベトナム史の研究・敘述においては、雲南との獨立後の關係自體がほとんど無視されてきた。そこでこの章では、まず獨立初期ベトナムの對雲南關係を調べ、その上でタイバック・チュオンソン山脈方面との關係の意味をも考えてみたい。

ベトナムの雲南との關係で唯一有名なのは獨立前、九世紀の南詔による安南都護府侵攻である。安南都護府の北部山地民壓迫などがきっかけとなって南詔の侵攻が始まり、八六〇年と八六三年の二度、都護府が陥落、八六七年によりやく唐將高駢によって擊退された。⁽⁵¹⁾

獨立後の雲南との關係については、李朝成立直後の一〇一〇年代に三件の事件がベトナム・中國史料に記録されている。まず一〇一二年に「蠻人」が金華歩と渭龍州（現トゥエンクアン省）に貿易に來たところを襲って馬萬餘匹を捕えた。⁽⁵²⁾

翌年、渭龍州の首長何氏が叛いて「蠻」に附いたので李太祖がこれを親征した。さらに一〇一四年には「蠻將楊長惠・段敬至」が二十萬人を率いて入寇したが、李太祖の子翊聖王によって破られたという。「蠻」とは「鶴柘蠻」つまり雲南勢力を指すことがわかっており、楊氏・段氏は南詔以來の雲南東部の名族として知られる。さらに一一三九年頃、李英宗（在位一二三七一―一二七五）の即位に對して、李仁宗（在位一〇七五―一一二七）の子と稱し、諒州（現バクザン・ランソン地域）の土豪申氏に連なるとおぼしき申利なる人物が、ベトバック地域一帯をまきこむ大反亂を起こすが、宋側史料によれば大理が兵三千をもって彼を助けている。^(補註)

以上からまず、北部山地におけるベトナムの勢力は獨立當初にはせいぜいトゥエンクアンまでしか及んでいなかったこと、逆にかなり廣い範圍に雲南の政治的影響力が及んでいたことが明らかである。紅河以東、廣西國境までのベトバック地方を、對中國境維持のために獨立初期ベトナム國家が懸命に支配したことはよく知られているが、それは雲南勢力からも守られねばならなかったのである。タイ系などベトバック諸民族が雲南東部の白蠻系諸族などと深い政治的・文化的關

係をもっていたことは當然であろう。

では紅河デルタのベト族社會にとつてはどうだったろうか。南詔の安南都護府攻撃に關するベトナム史の論述を見ると、南詔は（反中國派の）同盟者として意味をもつだけで、ベト族社會にとつては別の世界からの偶然的な侵入者にすぎなかったように描かれている。しかし筆者は、ベトバックの住民が雲南勢力とある程度「世界」を共有しえたのなら、紅河デルタの住民たちも同じことだったと考える。「世界」を共有するとは、單なる物理的な攻撃だけでなく、相手からの文化的・社會的吸引力ないし浸透力が、自己の統合やアイデンティティに對して脅威になりうるということである——對中關係の眞の問題もそこにあった——。

こう考える理由の第一は、兩者の「基層文化」の共通性である。ベト族の原初的社會組織の山地タイ族との親縁性の指摘以來、雲南と北部ベトナム雙方を含む東南アジア大陸部北部の幅廣い文化的交流や共通性が、民族學や考古學の分野で次々と明らかにされてきた。王朝時代ベトナムに見られた土他割換制⁽⁵⁶⁾＝公田制なども、タイ族「ムアン社會」に共通の制度に由來するものと理解される。

第二に、以上の事實がよく知られているにもかかわらず對雲南關係が無視されてきた背景には、ベト族は「中國化」しているがタイ系など雲南少數民族はそうでない、というイメージがあるのではないかと疑われるが、ベトナムの獨立當初に關する限り、この對比は後世ほど明瞭になっていなかった。當時のベトナム國家および紅河デルタ社會において、漢字による表現體系と、せいぜい男系の世襲王朝システム以上に、統治原理・組織原理として「中國的原理」が働いていたとは思えないことは再三述べてきた通りである。そうした範圍の「中國化」ならベトバックや廣西の「山地」諸民族にもしばしば見られるところであり、一〇四〇～五〇年代に宋と李朝の雙方を震撼させた廣源州（現カオバン省）の農氏も、「大南國」などの「中國式國家」を築こうとしている。⁽⁵⁷⁾南詔・大理國家が同じ意味で「中國式國家」であったことも、明白々な事實である。⁽⁵⁸⁾

この對雲南關係の後世への影響の深刻さを窺わせる状況證據が二つある。一つは十四世紀に成立したとされ、陳朝期國家祭祀體系の姿を傳える『越甸幽靈集』、もう一つは十五世紀の民間信仰の記録とされる『嶺南摭怪』である。前者（東洋文庫藏本）は二十七柱の神靈の事蹟を列擧する。表3の通り六柱が「歷代人君」、十一柱が「歷代人臣」と人格神が過半数を占め、實在の人物も多数含む。そのすべてに陳朝國家がどんな稱號を與えたかを記すほか、その神が「いつ出現したか」を述べたものが多い。うち六柱が李太祖・太宗の時に現れており、李朝初期の王權が佛教とならんでこれらを利用し、王權安定のための「李朝教」とでもいったものを作り上げたことが指摘されている。⁽⁵⁹⁾

しかしもう一人、しばしば神靈の出現に立ち會った人物がいる。それは唐末の高駢である。そのうちハノイの土地神「廣利大王」が「高駢が羅城を築いた時」に出現し、その方術によっても鎮壓されなかったという話は、ベトナム民族精神の發露としてよく引かれてきた。⁽⁶⁰⁾だが、他の四柱はいずれも南詔との戦いの際に出現している（表3）。「嘉應善感靈武大王」は、高駢が南詔を破った際に現れたというだけだが、「果毅剛正王」は「高駢が南詔を討平したので」現れた。また「校尉英烈威猛輔信大王」はそのものずばり「王（高駢）の夢に出て來て助順した」といい、「善護國公」は高駢が祭を設け神の默助を求めたところ夜更けに現れたとある。他にも「證安佑國王」は李太祖の前に姿を現し、自分が何度も賊の撃退を助けてきたことを語っているが、その中には高駢が南詔を破ったことも含まれている。高駢の神靈好きのキャラクターだけでなく、南詔との戦いが陳朝期まで深刻な「民族的記憶」として傳わっていたことにも注目すべきだろう。

それだけなら主觀的なアイデンティティなど持ち出さずとも、客觀的な「民族の危機」の重大さを示すと見れば十分、と考えられるかもしれない。だが、『嶺南摭怪』卷二には「南詔傳」という不思議な物語が載る。長文なので要約すると、南詔は南越の趙武帝（趙佗）の後裔である。趙氏滅亡後、その子孫は紅河デルタの南方「神符横山」などの地に集まり、南越が訛って南詔と呼ばれるようになった。その後演州・驪州方面にあった「婆夜國」と通じた。東晉も唐も——高駢すら——南詔を平定できなかったが、五代後晉の時、南詔は攻められて哀牢（ラオス）の地に退いた、今の盆蠻（引用者註

表3 『越旬幽靈集』の神名と出現時期

神 名 (本名)	事蹟 ^{①生前の事蹟または本来の神名} ^{②後世に出現した際の事蹟}
(歴代人君) 嘉應善感靈武大王 (士燮)	①漢末に交州太守となり王を稱す ②唐咸通中 (高駢が南詔を破った時) に出現
布蓋孚祐彰信義大王 (馮興)	①唐代宗大曆中に反亂, 布蓋大王と呼ばれる ②吳權が白藤江で南漢を破った時に夢で來助
明道開基聖烈神武皇帝 (趙光復)	①梁代に自立, 趙越王と稱す
英烈仁孝欽明聖武皇帝 (李佛子)	①梁代に自立, 後李南帝と稱す
天祖地王社稷帝君 (后稷)	①周家の始祖
徵聖王 (徵側・徵貳)	①後漢代に自立 ②李英宗の時, 大旱に雨を呼ぶ
貞烈夫人 (占城王乍斗の妃)	①李太宗に捕われ自害 ②太宗の夢に出る
(歴代人臣) 威明勇烈顯忠佐聖孚祐大王 (李日光)	①李太宗の時父安を管す ②陳太宗, その神位を戴いて占城を攻め成功
校尉英烈威猛輔信大王 (李翁仲)	①秦始皇に仕える ②唐の安南都護趙昌に夢で學問を説き, 高駢が南詔を破った時に夢で助順
太尉忠輔勇武威勝公 (李常傑)	①李聖宗・仁宗朝に活躍
保國鎮靈定邦城隍大王 (蘇百)	①晉の時三世同居 ②唐の都護李元喜, 李太祖などの夢に現れる
洪聖佐治大王 (范巨倆)	①黎大行に仕える ②李太宗の夢に現れ疑獄を解決
都統匡國王 (黎奉曉)	①李太宗の即位を助ける
太尉忠惠公 (穆慎)	①黎文盛に襲われた李太宗を救う
却敵威靈二大王 (張畔・張喝)	①趙越王に仕える ②吳天策が李暉を討った時に夢で助ける。李常傑が宋を迎え撃った際には祠所から「南國山河」の有名な詩を吟ずる聲が聞える
證安祐國王 (李服蠻)	①李南帝を助ける ②李太祖の前に現れ, 唐高祖, 肅宗, 代宗, 高駢, 吳權, 黎大行らが敵を破るのを助けたと語る
回天忠烈王 (李都尉)	①? ②陳元豐年間元寇の際, 帝にお告げを下す
果毅剛正王 (高魯) (浩氣英靈)	①安陽王の將 ②高駢が南詔を平げた後, 夢に現れる
應天化育元君	①南國地祇 ②李聖宗の占城遠征や英宗の祈雨を夢で助ける
廣利大王	①龍度王氣之君 ②高駢が羅城 (ハノイ) を築いた時現れ, 高駢の方術によっても鎮壓されず
盟主昭感大王	①銅鼓山神 ②李太宗が太子時代の占城遠征, 太祖没後の王位争いなどにつき, 太宗を夢で教える
開元威顯大王	①天神
冲天威信大王	①土神 ②李太祖, その佛法護持の聲を聞き, 書を見る
佑精顯應王	①山精。雄王の娘を水精と争う
開天鎮國大王	①藤州土神 ②黎臥朝の藤州統治時代に靈威をあらわす
忠翊威顯大王	①土令長 ②唐の峯州都督李常明の夢に現れる
善護國公	①海濟郡土神 ②高駢, 南詔を討つ際に神の默助を求めたところ聲を聞かせる
利濟通靈王	①火龍之精 ②昔, 洪州人の漁師兄弟の夢に現れる

―チャンニン高原に住む〕がこれである、といった内容である。⁽⁶¹⁾

ここでは南詔が益蠻―ラオ族の前身だという認識の一方で、その祖先が趙佗とされる。ところが當時のベトナムの歴史記述では、最初の中國式史書とされる『大越史記』が趙武帝から始まるなど、趙佗は單なる中國人支配者ではなくベトナムの正統皇帝とされている。⁽⁶²⁾『嶺南撫怪』南詔傳はある種の「ベトナム南詔同祖論」⁽⁶³⁾を體現しているわけである。とすれば『越甸幽靈集』の記述に、南詔を神靈の力により自己のアイデンティティから「切り離す」努力のあとを見ることが不可能ではなからう。

しかし實際の歴史の中では、一二五二年のモンゴルによる征服以降、雲南は徐々に「北」の世界に組み込まれてゆく。一方タイバック―チュオンソン山脈方面でのタイ系諸民族の活動が次第に活潑化する。それはベトナム年代記によれば一〇四八年の哀牢征討、一〇六七年の牛吼・哀牢の朝貢などから始まり、一一五九年にも牛吼・哀牢が叛く。⁽⁶⁴⁾陳朝期にタイバックのダー川（茫江）流域やティンホア・ゲアン西部の山地で繰り廣げられた哀牢・牛吼との抗争は有名である。こうしてベトナム國家の「西」と言えば雲南でなく――もはや眞臘でもなく――タイバック―チュオンソン山脈方面のタイ系諸民族との關係を考えて差し支えない狀況が、陳朝期には出來上がったと言える。

その後の「西」との關係については、最近の一連の研究（註50）で詳しく論じられている通りである。そこでの主要な相手となるタイ系諸民族は、かつての南詔・大理勢力の一定の「中國化」などとは異なり、主にインド的表現體系をモン・クメール語族などを通じて受容してゆく。この新しい「タイ化」の波が、ベトナム北部山地―チュオンソン山脈一帯を全體として「非中國的な」世界に變えたものと思われる。一方デルタの住民は徐々に「中國化」の度合を深める。ここにデルタ―中國的、山地―非中國的という對立が明確化する。それは同時に、デルタとその外縁とで大差ない生活をおくっていた「ベトナムオン族」が、「中國化したベトナム」と「タイ化したムオン」に分化する過程でもあったと考えられる。⁽⁶⁵⁾「西からの脅威」の中味が「雲南化」から「タイ化」へと變じたことは、ベトナム國家にとって相手を「同じ世界の中の

ライバル」から「別の世界からの侵略者」へと外在化する効果があったと言えよう。

四 「ベトナム型華夷秩序」の確立

以上のように獨立當初のベトナムの前には、「東南アジア唯一の中國式國家」という後世の姿とはかなり違った對外關係が展開していた。チャンパーに對する「南進」はまだ本格化せず、「東南アジア的」な「マンドラ」同士の關係が續いていた。一方、雲南國家が消滅するかベトナム自身が「中國化」の度合をはるかに強めないかぎり、東南アジア「唯一」の中國式國家を名乗ることも不可能だった。それゆえ「南國意識」の最初の表現として有名な一〇七六年の李常傑の詩「南國山河南帝居、截然分定在天書、如何逆虜來侵犯、汝等行看取敗虛」も、「北からの獨立」は主張できてもその「南國」自身がいかなる國家であるのかは表現できなかった。

だが、十四世紀には狀況が違ってきた。「南」への壓力の強まり、「西」との對立の明確化と平行して、それらとの關係の性格をはっきり規定する努力が始まる。それは一方で「占・牢等國語に倣う」ことの禁止（本稿一六八頁）を通じての周邊諸民族の「外在化」、他方では個々の對外交渉における相手國の屬國扱いにとどまらぬ、ベトナムが「諸蠻」全體に君臨するという態度の形成などの形をとる。

後者の最初の例は管見の限り、一三三四年に陳明宗上皇が哀牢を親征した際に、父安の襄陽縣に残した「磨崖紀功碑」である。『欽定越史通鑑綱目』正編九 陳憲宗開祐六年條に引く同碑は、上皇の親征の際に「占城國世子、眞臘國暹國及び蠻酋道臣癸・禽車勒、新附杯盆蠻酋道聲、車蠻諸部」が各々方物を奉じ、「先を争って來見した」と主張する。その眞偽を確かめるすべはないが、當時の「南進」や「西方關興」がインドシナ諸地域への知識を廣げたことが、「華夷意識」の強化と相まって「諸蠻國に君臨する」雄大な發想を生み出したことは間違いない。⁽⁶⁶⁾

「中華帝國」にとって「諸蠻に君臨する」「華夷秩序」が不可欠であったとすれば、これらの態度・發想が明確に形成

され、しかも最大の相手チャンパーとの間についてそれにふさわしい力関係が實現された時期であったからこそ、一四二八年の「平吳大詔」は、「南のもう一つの中華」という形で「南國」の定義づけを完成させることができたと言える。ここでも十四世紀が「ベトナム史の分水嶺」⁽⁶⁷⁾であった。

十五世紀の黎朝ベトナムでは、その理念がますますふくらむ。一四四二年に太宗が没した際の論贊(『全書』本紀一一 太寶三年條)に「爪哇・暹羅・三佛齊・占城・滿刺加等國航海修貢す」と豪語し、一四八五年には「諸藩使臣朝貢京國令」を定めて占城・老撾・暹羅・爪哇・滿刺加等を朝貢國と規定する(同書二三 黎聖宗洪徳十六年十一月條)など、東南アジアに君臨する意識が強まってゆく。一四七一年のチャンパー遠征、一四七九年のラオス遠征の成功は、その一定の實體化にも寄與したであろう。その後も、對等ないしより強力な國家の出現によって「華夷秩序」の實態が暴露されることはあつても、インドシナレベルで覇を競いうるベトナムの地位と、對外關係の原理としての「華夷意識」の枠組が崩れることはもはやなかったのである。

註

- (1) 英語で言う Sinization ないし Sinicization のこと。本稿ではこれに對應する語として「漢化」を使わずすべて「中國化」とするが、その理由は前近代の、特に周邊國家の側にとって兩者を區別するのは難しいためと、おなじみ「インド化」の對概念として使用するためである。また「中國文化の攝取」などとせず、ベトナム人には「植民地史觀」と怒られそうな「中國化」の概念を用いるのは、筆者が「民族」の主體性の現れ方さえをも規定する「地域世界」のあり方、そこに働く力を重視するからである。
- (2) 本稿でも慣例に従い、現在のベトナム領全體の歴史でなく、その形成の主體となった集團の支配地域の歴史をベトナム史と呼び、その集團の中核をなす人々をベトナム人と呼ぶ。
- (3) 古田元夫『ベトナム人共產主義者の民族政策史——革命の中のエスニシティ——』大月書店、一九九一年、五〇頁。なお社會主義ベトナムでの「民族起源問題」および「民族形成問題」の論争史については Phan Huy Lê, Cuộc hội thảo về vấn đề hình thành dân tộc Việt Nam, NCLS (Nghien

cũu Lich sử) số 200, 1981. 古田元夫「ベトナム史學界とベトナム史像」『歴史と文化』ⅩⅦ(東京大學教養學部人文科學科紀要第八十七輯)、一九八八年など参照。

- (4) 拙稿①「陳朝期ヴェトナムの政治體制に關する基礎的研究」『東洋史研究』四一一、一九八二年、②「陳朝期ヴェトナムの路制に關する基礎的研究」『史林』六六一五、一九八三年、③「ヴェトナム李朝の軍事行動と地方支配」『東南アジア研究』二四一四、一九八七年、④「ヴェトナム李朝の地方行政單位と地方統治者」同二六一三、一九八八年、⑤「一〇～一五世紀の南海交易とベトナム」『シリーズ 世界史への問い3 移動と交流』所收、岩波書店、一九九〇年。また十九世紀ベトナムの東南アジア性については Woodside, A. B., *Vietnam and the Chinese Model*, Cambridge, Mass., Harvard Univ. Press, 1971, 1988. 八〇年代ベトナムの東南アジア性への注目については古田前掲論文参照。

なお十世紀以降の「東南アジア性」を、よく知られた北屬期以前のそれ(かつてはそれは、北屬期に完全に「中國化」したものと安直に信じられていた)の根強い殘存とのみ考えるなら、それは「東南アジア社會停滯論」のそりを免れない。中國社會の發展が「中國化」の壓力を強めたのと同様、歴史時代にも東南アジア社會の發展がベトナムを「東南アジア化」することがあったと——今のところ實證は困難だが——筆者は考える。

- (5) Maspero, G., *Le royaume de Champa*, Paris et Bruxelles, les Editions de Nobelet, 1928, Paris, l'École

Française d'Extrême Orient, 1988.

- (6) Lê Thành Khôi, (1) *Le Việt-nam, histoire et civilisation*, Paris, Les Editions de Minuit, 1955, 再版(2) *Histoire du Vietnam des origines à 1858*, Paris, Sudestasie, 1987. ほぼ同内容。

- (7) Coedès, G., (1) *Les peuples de la péninsule indochinoise*, Paris, Dunod, 1962, (2) *Les états hindouisés d'Indochine et d'Indonésie*, Paris, E. De Boccard, 1948, 1964. (日本語英譯・和譯)(1)『インドシナ文明史』みすず書房、(2)『東南アジア文化史』大藏出版(あり) またこれらフランス人の研究すべてに強い影響を与えたものにベトナムの「中國化」を強調する H・マスpero のベトナム史研究がある。Maspero, H., (1) *Le protectorat général d'Annam sous les T'ang, BEFEO (Bulletin de l'École Française d'Extrême Orient)* X, 1910, (2) *Étude d'histoire d'Annam II, la géographie politique de l'empire d'Annam sous les Lî, les Tràn et les Hò (Xe—XVe siècles)*, BEFEO XVI—1, 1916, (3) *Étude d'histoire d'Annam IV, le royaume de Van-Lang, BEFEO, XVIII—3*, 1918, (4) *Étude d'histoire d'Annam V, l'expédition de Ma Yuan, ibid.*, (5) *Étude d'histoire d'Annam VI, la frontière de l'Annam et du Cambodge du VIII^e au XIV^e siècle, ibid.* など。本稿にも關係する。

- (8) チャンパーの存在がいかにベトナムにとって偶然かつ非本質的なものと考えられてきたかを象徵するのは、レー・タ

イン・コイのベトナム通史である。例えば陳朝が元寇を撃退した後に元への朝貢を再開せねばならなかった理由として彼は、元との国力の差という常識的な理由に加えてわざわざ——その前後で元と戦うためのチャンパーとの協力関係に言及しておきながら——ベトナムが「孤立しており、同盟国もなかった」と述べるのである（前掲 Lê Thanh Khôi (1), p. 187, (2), p. 189）。

- (9) チャンパーと戦う必然性・宿命性が語られなかったわけではない。「中國化された」ベトナムと「インド化された」チャンパーの不可避の対決（前掲 Cordès (2), 1964, p. 88）、双方の人口過剰と土地不足（後述）などである。しかし前者は中國的國家イコール軍事膨張という単純な見方（Cordès (2), 1964, pp. 71—72.）と後者の説——そして社會ダーウィニズム的常識？——以外に衝突の不可避性の根拠をもたず、後者は後述の通り實證にたえない。その他との本にも、ベトナムの「中國化」ないし「中國式國家體制」がチャンパーやカンボジアを壓倒することを可能にしたと書いてあるが、それらはほとんど國家・民族の興亡を論じているだけで、對外關係の意味や評價を考えてはいない。

- (10) 社會主義ベトナムでは研究蓄積が乏しい中でも、後述の通り單純な弱肉強食論や「南進」賛美を批判するが、事實認識としてはやはり、一〇六九年以降をチャンパーの「滅亡過程」（*Tiền Quốc Vương-Hà Văn Tấn, Lịch sử chế độ phong kiến Việt Nam, tập 1, Hà Nội, NXB Giáo dục, 1960, tr. 304.*）とするような見方を共有している。

- (11) セデスの中國化・インド化對決論より進んだ形でベトナムの「南」との關係に高い位置づけを與えたものに、「南進」と對中抵抗を、有機的に關連したベトナム史の二大ダイナミズムとする坪井善明氏の説がある（『近代ヴェトナム政治社會史』東京大學出版會、一九九一年、七—八頁）。次節で述べる通り對中關係との連動性、對東南アジア關係の高い位置づけには筆者も賛成だが、十世紀から十九世紀までの「南」との關係全體を「南進」で代表させるのは、十五世紀以降に偏った視點と言わざるをえない。

- (12) 以下の地名や事件については特記しない限り、註(5)（7）の G・マスpero、レー・ティン・コイ、セデスの各文獻・Maspero, H. (1) (2), 前掲拙稿②（④など）による。

- (13) 黎桓の遠征後の混亂を経て、西暦一千年頃からチャンパーの「首都」は南方のヴィジャヤに落ち着く。その理由はベトナムの壓力を避けるためとどの本にも書いてあるが、當初の理由がその通りだったとしても、舊都インドラプラ（『諸蕃志』や『元史』の舊州）の方も十四世紀まで勢力を維持している。ヴィジャヤの地位が保たれたのは、當時の國際商品沈香などを産する中部高原・メコン水系の後背地との結びつきを強めたためかもしれない。石井米雄・櫻井由躬雄『東南アジア世界の形成』講談社、一九八五年、一二六—一二七頁、遠藤正之『占城期チャンパー王國の構造および統合要素に関する一考察』一九九〇年度上智大學文學部卒業論文、三、一七一—一八頁など参照。

- (14) その前に「命輔國吳士安率三萬人、開陸路自南界至地哩」

『全書』本紀一 黎大行興統四（八九二）年秋八月」という記事があるが、結果のほどはわからない。

- (15) Nguyễn Thê Anh, *Le Nam Tien dans les textes vietnamiens, Les frontières du Vietnam, publiés sous la direction de P. B. Lafont, Paris, l'Harmattan, 1989, p. 122.*

(16) 古田前掲書、五二頁。

- (17) 新江利彦「チャンパー亡國の年代について」、『白山史學』二七、一九九一年、五五一—五六頁。

(18) 『全書』本紀三 李神宗天順五年秋七月「占城國人員般等逃歸其國、至日麗、棄人執送京師」。なお一二二五年頃成立した宋の趙汝适の『諸蕃志』（卷上 志國 占城）は占城の屬國として烏麗（一二〇六年の烏里か）・日麗の名を挙げる。

(19) 前掲拙稿③、四〇六—四〇七頁。

(20) 前掲 Maspero, H. (5), 前掲拙稿⑤、一三三四頁。

(21) G. マスperoのチャンパー通史（註(5)）は一二〇七—九〇年について述べた章を *L'apogée*（絶頂）と題した。セデスは「ベトナム一貫南進説」の立場からこれを批判し、制蓬義の反攻を落日の最後の輝きと決めつけたが（前掲 *Codès* (2), 1964, p. 427）二人とも兩國の社會發展などを考慮してゐるわけではない。單なる力關係だけで論ずるなら G・マスperoの表現もあながち誤りとは言えまい。

(22) 表1のように一二三九一年に早速、化州から「占城地方」まで軍を送り、化州は最終的にベトナム側についたらしい。一四〇二年には「占洞・古壘洞」（現クアンナムダナン・クア

ンガイ兩省）を奪って升華思義四州とした。一四〇三年にはより南方「暹羅界」までの「板達郎・黑白及沙離牙等の地を分つて州縣となさんとして」（『全書』本紀八 胡漢蒼開大元年條 首都ヴィジャヤを圍んだが落とせなかったという。板達郎は明らかに、チャンパー國家を構成する主要地方勢力中の最南端に位置した *Pāṇḍuraṅga*（現ニントゥアン、ピントクアン方面）を指す。もっとも明のベトナム侵略時にチャンパーは升華思義四州を奪回したらしく（山本達郎『安南史研究』山川出版社、一九五〇年、五七八—五七九頁）、黎朝初期には化州がたびたびチャンパーの攻撃を受ける。

(23) 『全書』『史略』を對照すると、占城の朝貢の記録は前黎朝期（九八〇—一〇〇九）に一回、李朝期に五六回程度である。また『全書』に見える陳朝・胡朝期の朝貢は一八回、十五世紀黎朝のそれは八回である（亡命は除く）。

(24) 片倉樞「ベトナム・中國の初期外交關係に關する一問題」『東方學』四四、一九七二年、一〇一頁。

(25) 『農民の南進』は前掲 *Le Thanh Khoi* (1), p. 163, (2), pp. 162—163, Chesneau, J. *Contribution à l'histoire de la nation vietnamienne*, Paris, Éditions Sociales, 1956, p. 32, *Codès* (2), 1964, p. 427. などフランス系の研究者に一般的なかえのようである。初期の「南進」の開拓性を説くグエン・テー・フィン（註(15)）も、十世紀から一貫して北部デルタの人口壓が高かったという説を踏襲している。

(26) 櫻井由躬雄「ベトナム红河デルタの開拓史」渡部忠世責任編集『稻のアジア史2』、小學館、一九八七年、同「ベトナ

ム村落の形成』創文社、一九八七年、五・七章など。

(27) 前掲拙稿⑤、二三三頁。

(28) 片倉穫『ベトナムの歴史と東アジア——前近代篇——』杉山書店、一九七七年、六九、七九—八〇頁、片倉穫・吉澤南「ベトナム概史」アジア・アフリカ研究所編『ベトナム 上』水曜社、一九七七年、七九、八四頁。

(29) 黎朝後期(の北部)における奴隸制ウクライナ衰退の理由を片倉氏は、十五世紀後半のチャンバ國家の解體後に奴隸供給が途絶したことで、ベトナム内部の小農の成長などに求めたが(註(28)参照)、本當の「南進」はむしろ十五—十八世紀のことであり、黎朝後期には南北分裂があったとはいえ南部との交易は續いていた。また奴隸は北部山地民からも供給したかもしれない。それよりも陳朝・黎朝前期に國家的治水・水利事業が基本的に完成した後の北部デルタ農村での人口増→土地細分化が、奴隸を含む「家父長制家族」による經營を不可能とし、より勞働集約的で奴隸を含まない純粹な小經營を一般化させた——近世日本の「小農民經營の自立」および「勤勉革命」(速水融「概説 一七一—一八世紀」速水・宮本又次編『日本經濟史1 經濟社會の成立 17—18世紀』岩波書店、一九八八年、三五—三七頁、齊藤修「大開墾・人口・小農經濟」同書所收、など)と比較可能か——ものと筆者は考える。

(30) 音楽・建築について Trần Quốc Vương-Hà Văn Tấn, sách đã dẫn tr.304. 民間文藝・繪画について Phan Đăng Nhật, Sự gần gũi Việt-Chăm qua một số truyền dân

gian, *Tạp chí Văn học*, số 5—1976. Lê Văn Hảo, Tìm hiểu quan hệ giao lưu văn hóa Việt-Chăm qua kho tàng văn nghệ dân gian của người Việt và người Chăm, *Tạp chí Dân tộc học*, số 1—1979. 基層文化について Lê Văn Hảo, Quá trình hòa hợp và gần gũi Việt-Nam—Cham-pa trong lịch sử dân tộc, *NCLS* số 189, 1979. Nguyễn Duy Hinh, Thư bàn về quan hệ Việt-Chăm trong lịch sử, *Tạp chí Dân tộc học*, số 2—1980. なに参照。

(31) 黎朝初期の阮鷹『抑齊集地輿志』にも「國人毋得效吳・占・牟・暹・眞臘諸國語及服裝以亂國俗」という記事がある。

(32) 『全書』の黎文休のコメントなど陳朝儒臣の言説と李陳朝社會の現實とのギャップ、彼らによる歴史像再構成の意味などが、ウォルターズ氏の一連の業績の中で論じられている。Wolters, O. W. (1) "Lê Văn Hưu's Treatment of Lý Thần Tông's Reign (1127—1137)", in C. D. Cowan and O. W. Wolters (eds.), *Southeast Asian History and Historiography*, Cornell Univ. Press, 1976, (2) "Possibilities for a Reading of the 1293—1357 Period in the Vietnamese Annals", in David G. Marr and A. C. Milner (eds.), *Southeast Asia in the 9th to 14th Centuries*, Canberra, Research School of Pacific Studies, ANU; Singapore, Institute of Southeast Asian Studies, 1986, (3) *Two Essays on Đại-Việt in the Fourteenth Century*,

the Lạc Việt Series 9, New Haven, Yale Center for International and Area Studies, 1988. など参照。

- (33) 『全書』本紀五 陳太宗建中五年（一二一九）條は、李朝

末大亂の際の陳氏のライバルだった阮嫩の死を伝える。李末大亂についての記述のより詳細な『史略』は彼の死を建嘉九年（一二一九）條に繋げるから、『全書』のこの記事には疑問があるのだが、その中に「麾下潘麻雷竊飛馬逃去、不知所之。麻雷占城人、轉質哀牢、嫩收爲奴、料敵制勝、用兵如神」とある（『史略』にはこの記事なし）。これなども「誰にでもつくし誰でも受け入れる」關係を示すと言える。

- (34) 古田元夫「ベトナム人の「西方關與」の史的考察」土屋健治・白石隆編『東南アジアの政治と文化』東京大學出版會、一九八四年、五頁。

- (35) 考證は前掲 Maspero, H. (5), pp. 29—30.

- (36) 李陳朝のティンホア、ゲアン・ハティン支配の努力については前掲拙稿①、一〇一—一〇二頁、同④、二六〇、二六三頁など参照。

- (37) 通説では狭小な海岸平野しかもたないチャンパーが豊かな北部ベトナムの平野を狙ったこと（だが所詮、北部の大口にはかなわないとされる）、チャム人の海洋民としての剽悍な性格などがベトナム攻撃の理由として説かれるが、いずれも中國・ベトナム史料の鵜呑みと現代の常識の結合にすぎない。これに對して後述の「マンダラ」論は當然チャンパーをもその對象としており（Higham, Ch., *The Archaeology of Mainland Southeast Asia*, Cambridge Univ. Press,

1988, Hagestein, R., *Circles of Kings*, Dordrecht & Province, Foris Publications, 1989. など参照）「マンダラ」論にもとづく遠藤前掲論文は、チャンパー北部の地方勢力による、勞働力の掠奪や貿易の主導權獲得のための攻撃を對ベトナム攻撃の中心と見る。

- (38) Nguyễn Thế Anh, *op.cit.*, p. 121.

- (39) Taylor, K. W., "Authority and Legitimacy in 11th Century Vietnam", in *Southeast Asia in the 9th to 14th Centuries*, pp. 162—163.

- (40) Đào Duy Anh, *Lịch sử Việt Nam*, quyển thượng, Hà Nội, Nxb Xây dựng, 1955, tr. 125. などこの觀點を強調する。

- (41) 古田註(34)論文、四頁。なお「北」とその他の方角の脅威の連動性の認識については、元寇撃退の直後に陳仁宗が哀牢親征を企てた際の「朝臣諫曰、胡虜初退、瘡痍未定、豈可興兵。帝曰、祇可以此時出兵耳。夫虜退後、三境必謂我士馬物故、勢不能振、將有內侮、故大舉以示威」(『全書』本紀五重興六年春二月條)という記録からも窺われよう。黎桓が九八一年に中國軍を撃退した翌年にチャンパー出兵を行ったのも同じ發想ではないか。

- (42) 阮朝については、Woodside, *op.cit.* の他、坪井善明「ヴェトナム阮朝（一八〇二—一九四五）の世界觀」『國家學會雜誌』九六—九・一〇、一九八三年がある。それ以前については古田前掲書五五一—六二頁などの概論を見る程度である。

- (43) 『宋會要輯稿』蕃夷四 交趾 熙寧二（一〇六九）年二月

八日條に「南平王李日尊上言、占城國久闕貢奉、臣親率兵討之、虜占城王。降詔答之」とある。ベトナムが自らの「華夷秩序」を中國に誇示しようとしたものと言えよう。

- (44) ただしその後、本當の「南進」つまり「華」の不斷の膨張——フランス人やベトナム人がこれぞ中華帝國の本質と考えるもの——によつてチャンパー國家は消滅させられ、より遠方のカンボジア・ラオスなどに新たな「夷」が求められる。實際限ない人口壓を生むような社會を築いてはじめて「華夷秩序」にふさわしい力關係が實現しえたと考えれば、結局チャンパーの滅亡は十四世紀に運命づけられたことになる。だがそれにしても、一四七一年に獲得したクアンナムダナン以南の地域が實際にベトナム農民によつて埋め盡されるのは、廣南阮氏政權下のことと筆者は推測する。廣南阮氏の「南進」については鄭氏への對抗などその時代独自の事情をあらためて考察する必要があると思われる。

(45) 註(28)の各論文参照。

- (46) Lê Kim Ngân, (1) Một giả thiết về kết cấu kinh tế của xã hội Việt Nam từ thế kỷ X đến thế kỷ XIV, trong quyển Viện Sử học, *Tìm hiểu xã hội Việt Nam thời Lý-Trần*, Hà Nội, Nxb Khoa học Xã hội, 1981. (2) Thế kỷ X và phương thức sản xuất châu Á, trong quyển Viện Sử học, *Thế kỷ X, những vấn đề lịch sử*, Hà Nội, Nxb Khoa học Xã hội, 1984, など参照。

(47) 石井・櫻井前掲書一一八頁、前掲拙稿⑤など。

(48) この記事の重要性を指摘したのはテイラー(註(39))であ

る。なお『全書』の編者吳士連のこの事件に對するコメントは「占城風浪賊掠我海邊民、問罪之師、其可已乎、蓋正其罪名也。苟云遠人不服、則修文德以來之、豈可勒兵於遠哉」と批判する。十五世紀ベトナムの儒臣は李太宗のこの行動を「華夷秩序」の原理に合わないと考えたわけである。

- (49) 「バンダラ概念」については Wolters, O. W., *History, Culture and Region in Southeast Asian Perspectives*, Singapore, Institute of Southeast Asian Studies, 1982, Hagestein, *op. cit.*, が詳しく展開する。筆者の關心に沿つてそれらを整理・補足すると、それは専制國家と封建國家の二分法で言えば後者に近い重層的權力構造と在地勢力の強固さを示すが、相對的人口不足と移動性の高さ、交易の富の大きさ、中間權力の非制度化などのため社會的流動性が高い。村落結合、領域概念や血縁原理、民族意識などいずれもさほど嚴密性・排他性をもたず、結局主權の強さは君主個人の能力に比例し、交易・貢納・掠奪による財の集積と地方支配者との間のパトロン・クライアント關係の廣がり具合にかかる。獨立初期のベトナム國家・社會をうけた概念によつて理解しようとしたため Trần Quốc Vương, "Traditions, Acculturation, Renovation: The Evolutional Pattern of Vietnamese Culture", in *Southeast Asia in the 9th to 14th Centuries*, 前掲拙稿⑥などがある。

ただし「バンダラ」そのものは、東アジア・南アジア兩世界の「周縁」でありながら巨大な交易ルートを擁するという東南アジアの位置によつて規定されたものであり、「中心」

の側の「中國モデル」などと同じの論理平面上で完全に區別・對比できる存在ではないと筆者は考える。

- (50) 古田註(34)論文 *Nauyễn Thê Anh, Établissement par le Viênam de sa frontière dans les confins occidentaux, et Savèng Phinith, La frontière entre le Laos et le Viênam (des origines à l'instauration du protectorat français) vue à travers les manuscrits lao, dans Les frontières du Viênam.*

- (51) この過程の考證はベトナム側から Taylor, K. W., *The Birth of Vietnam*, Univ. of California Press, 1983. 雲南側から藤澤義美『西南中國民族史の研究』大安、一九六九年、林謙一郎「南詔國後半期の對外遠征と國家構造」『史林』七五—四、一九九二年、など。

- (52) 以下の交渉過程については前掲拙稿③、四〇六、四一〇、四一二頁、同④、二五三頁など参照。

- (53) 大理の馬のベトナムへの輸入についての考證は片倉櫻「ベトナムの馬をめぐる二、三の考察」『内田吟風博士頌壽記念東洋史論集』同朋舎、一九七八年。のち「ベトナム前近代法の基礎的研究」風聞書房、一九八七年、所収。

- (54) Taylor, *op. cit.*, p. 239.

- (55) 前掲 Maspero, H. (3).

- (56) 櫻井前掲書、四四—四九、七七—七九頁。

- (57) 儂氏一族の活動については河原正博「儂智高の反亂と交趾」『法政史學』一一、一九五九年。のち「漢民族華南發展史研究」吉川弘文館、一九八四年、所収。諒州申氏、峯州・

眞登州の黎氏、渭龍州の何氏など李朝期紅河デルタ外首長が、李氏との頻繁な婚姻などにより大きな政治力をもち、漢字文化や佛教などの點で一定の「中國化」をとげていたことは前掲拙稿④で述べた。

- (58) 南詔大理の國家構造については註(51)の各文獻の他、武内剛「雲南社會における統合と宗教」『行動と文化』一一、一九八七年、同「南詔・大理國の國家構造に關する一考察」『立命館史學』一一、一九九〇年、林謙一郎「南詔國の成立」『東洋史研究』四九—一、一九九〇年など。これらが描き出す部族連合的な體制を「メンダラ」論と比較することも興味深いと思われる。

- (59) Taylor, K. W., "Authority and Legitimacy in 11th Century Vietnam", in *Southeast Asia in the 9th to 14th Centuries*, pp. 162—163.

- (60) 後藤均平『ベトナム救國抗爭史』新人物往來社、一九七五年、三九—四〇頁。白石昌也「ベトナムの「まち」——特に「くに」との關係を中心として——」『東南アジア研究』二一—一、一九八三年、一〇三頁。

- (61) 開智書局本 (Sai Gòn, Nhà sách Khai Trí, 1961) による全文は次の通り。

南詔者乃趙武帝佗之後。昔漢武帝辰、趙丞相呂嘉不服漢庭而殺漢使少安國・王李等。漢武帝命呂博德・楊撲等將兵伐之、擒衛陽王建德及呂嘉等而并其國、分置守令。趙氏既亡、其子孫各散四方、復會于神符・橫山空閑無人處、造船過海、突入境內、掠劫海濱、殺漢守令、稱為南

越、訛爲南詔。迨三國、吳王孫權命戴良・呂岱等爲守牧治、南詔自天擒山・河華・高陞・橫山・烏待海岸、大部・長沙・注堵磊蓋雷等處、山高海深、波濤險阻、絕無人迹、南詔之衆據而居之。其衆稍盛、乃以財貨珠玉、通于兩婆夜國、求爲親屬、以相救助。晉末大亂、有土酋趙翁李亦趙武之裔、兄弟衆多、勇力過人、爲衆所服、亦南詔會從、合二萬餘人、復以寶玉求通于婆夜國、乞海邊隙地以居之。時婆夜國命取海濱源頭、相分各半、分爲二路、上自鬱州至潯州爲茹還路、下自潯州至驩州爲臨安路、南詔翁李統治焉。於是加築城于潯州高舍社、東夾海、西至婆夜國、南至橫山、自立爲王。東晉時、命將軍曹可將兵來攻、翁李於源險處伏兵衆擊之、又出外連末山以避。彼聚則我散、彼散則我聚、朝出暮入、往來四五年間、未嘗交戰、晉軍不耐風障、死亡過半。及退還、南詔侵略長安都城各處、守令不能制。至唐愈盛、懿宗命高駢征之、不克而還。五代後晉石敬瑭命司馬李暹將兵十餘萬、攻于塗山、南詔稍退、遂附于哀牢邊地吳頭模國、今爲益蠻云。

- (62) 『大越史記』および現存の『全書』『史略』等の構成については陳荆和氏による後二者の解題を参照（『校合本大越史記全書』上、東京大學東洋文化研究所附屬東洋學文獻センター、一九八四年、『校合本大越史略』創價大學アジア研究所、一九八七年）。

- (63) タイ系諸民族の側からのベトナム同祖論としては、ラオス系のクンボロム王傳説が、始祖クンボロム王の七人の息子

の一人をベトナムの開祖とするのが有名である。Savang Pimh, op. cit. また「タイ民族形成」と獨立初期ベトナムとの關連を論じたものに星野龍夫「濁流と満月」めこん、一九九〇年、がある。

- (64) 前掲拙稿③、四〇七、四一〇、四一二頁など参照。

- (65) ムオン族は現在のヴィンフー、ホアビン、ティンホアなどのデルタ外縁の段丘・丘陵部に住み、言語・説話・酋長制などあらゆる面で「中國化」以前のベトナム族の姿を伝えるものと考えられてきた。そこで兩者の分離は北屬期に起こったと考えられがちだが、それにしても兩者の境界は獨立後も搖れ動き續けた（Trần Quốc Vương-Nguyễn Dương Bình, Một vài nhận xét về mối quan hệ Mường-Việt và quá trình phân hóa giữa tộc Mường và tộc Việt, *Thông báo Khoa học*, tập V, Hà Nội, Trường Đại học Tổng hợp, 1971）とか、兩者の分離は十世紀以降（古田前掲書、六四頁註6）という意見も多い。

そこでは分離の原因として山地側へのタイ族の影響（族名の Mường はタイ系諸民族の基礎的政治單位ムアンを指し、平地ベトナム族の側が山地の仲間を「ムアンの民」と呼んだことに由来すると言われる）と平地側での都市の發達（ハートキン Kinh = 京）があげられ（Lâm Tâm, Tên gọi của người Mường và mối quan hệ giữa tên gọi của người Mường với người Việt, *NCLS*, số 32, 1961）分離の時期としては「山猿」や「蠻」と李朝權力との抗争が目立った十二世紀がしばしば重視される（Nguyễn Dương Bình,

Góp phần tìm hiểu mối quan hệ Việt-Miêu trong lịch sử, *Tạp chí Dân tộc học*, số 1—1973).

なお十二世紀分離説は筆者の「中國化は陳朝から」説に矛盾するようだが、筆者の説は「中國的統治原理」がいつから十分機能し始めたかを説くものであり、それ以前にも様々な「中國化志向」が見られたことは否定しない。ただそれは「次代を準備する」ものではあっても、この山嶽との抗争や李朝の軍勢力獨占の企て（前掲拙稿③、四二—四一三頁）のように、當該王朝權力自體にとっては破壊的に作用することが多かったと思われる。

(66) 「インドシナ征覇の野望」の最初の記録は、管見の限り『全書』本紀七 陳憲宗開祐七（一三三五）年秋九月條の、明宗上皇が哀牢を親征して敗れ、重臣段汝諧が戰死したという記事にある。この時の汝諧の意圖は「意哀牢據南戎（引用者注—現ゲアン省）、其衆單弱、擊之必克、且岩臨屑邏大江、既克之後、俘獲沿流而下、過眞臘及諸藩國、皆震耀兵威、因諭諸國子弟入朝……」というものであった。なお『全書』陳紀の外國からの朝貢の記録は占城（註(23)）を除けば「牛吼・道密」「冊馬錫」（單馬錫＝ジャワのトゥマシクか）「大哇」（爪哇であろう）が各一回あるだけである（他に路鶴、茶哇、暹羅、閩婆の商舶の進獻の記録が各一回ある）。

(67) Wolters, *op. cit.*, Preface, vii.

(68) 『全書』黎紀の莫登庸の篡奪（一五二七年）以前の部分には、占城（註(23)）と各地の「土司」を除き、哀牢（盆蠻を除く）六回、爪哇・暹羅各二回、「羅羅斯甸國」「蘇間喀刺」（スマトラ島のサムドラ）各一回の朝貢の記録がある。ただし爪哇一回、暹羅二回、蘇間喀刺一回は「商舶」や「海舶」が「入貢」したというもので、ベトナム側の「擴大解釋」が続いている。その點は獨立初期の占城や眞臘の朝貢（李朝以前の朝貢回数は前掲拙稿⑤、二三三頁）と同じで「華夷意識」自體の矛盾というべきだろう。

(補註) また李仁宗の時、太師黎文盛が虎に化けて仁宗を襲ったという（『全書』本紀三 會豐五年（一〇九六）條。表3のように越甸幽靈集が李太宗の時とするのは訛傳）。『全書』はその動機を「先是、文盛有大理國奴、能奇術、故託此欲行篡弒也」とする。占城人奴隸の話（註(33)）とならぶ興味深い記事である。

(附記) 本稿は平成二年度文部省科學研究費補助金(獎勵研究(A))「地域世界の觀點から見たベトナム前近代の政治統合の變遷」の研究成果の一部である。

THE INSCRIPTIONS MARKING THE ACCESSION TO THE THRONE OF BILGÄ QAŖAN

KATAYAMA Akio

The 735 Bilgä qaŖan inscription refers to the accession to the throne of himself, and there are problems with the exceptional order of the four quarters and the lacunae in the thirteenth and fourteenth lines of its southern face. Judging from the composition of the text, the length of the lacunae and the possibilities for the missing words, it seems possible that the enumeration of high officials and tribal chiefs on the inscription for the time of accession to the throne of Bilgä qaŖan records the situation in which all those who assembled from “west, east, [south and north]” for the ceremony.

On the other hand, this interpretation concerning the high officials and tribal chiefs, when taken together with the words of Bilgä qaŖan recorded at the beginning of the southern face of Köl tigin inscription, makes it possible that the men who assembled from all quarters were arranged in two lines on the south and north to listen to Bilgä qaŖan’s address. The Turkic “nationalism,” the evidence of which can be found from the inscription, was expressed in Bilgä qaŖan’s words which should be considered as spoken in or soon after 716 in connection with the enthronement ceremony. It must be differentiated from evidence in the final passage on the southern face which dates from the time when the stele was erected.

VIETNAMESE POLITY TOWARDS ITS SOUTHERN AND WESTERN NEIGHBORS FROM THE TENTH TO FIFTEENTH CENTURY

MOMOKI Shiro

This paper aims to examine the history of Vietnam’s “external” relations in a new perspective, especially with regard to its southern and

western neighbors after its independence in the tenth century. As for its neighbor in the south, it has been said that Champā had suffered from constant and continual Vietnamese southward aggression or *Nam-tiến* since the latter's independence. In my view, it was only in the latter years of the fourteenth century that the balance of power between Vietnam and Champā was definitely lost. Before then, their relations had rather followed the "Southeast Asian" pattern in which the two polities or *mandalas* often struggled with each other for hegemony on one hand while maintaining close relations with each other on the other.

Concerning the western neighbors, its relations with the Yunnanese polities were central concerns of the Vietnamese polity in the early centuries after independence as they shared similar cultural traits and a comparable level of Sinicization. Later, when the Thai-Lao group became powerful on its western borders, rivalry within the Vietnamese realm between those in the non-Sinicized mountainous areas with Thai cultural traits and those in the Sinicized delta region became evident.

In the early centuries after independence, Vietnam was not yet to show its arrogance of claiming to be the "unique Sinicized country with the central status in the Southeast Asia" for claiming preeminence over its southern and western neighbors. In the fourteenth century, however, the Vietnamese began to see their polity as the "Southern Country" or "Middle Kingdom of Southeast Asia" which was entitled to reign over the surrounding barbarians. Later, in the fifteenth century when Vietnam had more or less realized such a dominant position, especially in its relations with Champā and Laos, the country definitely established its self-image as the "Southern Country."